

平成 21 年 6 月 9 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006 年度～2008 年度

課題番号：18720092

研究課題名（和文） 日本中世禅林における柳宗元受容の基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental study on Acceptance of Liu Zongyuan in Japanese medieval Chanlin

研究代表者

太田 亨 (OOTA TOORU)

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：80370021

研究成果の概要：日本中世禅林における文学研究の中で、中国文学作品がどのように伝来し、それらを禅僧がどのように消化し、自身の詩文作品に応用していったかについて体系的に論じたものは皆無である。本研究は、日本中世禅林における柳宗元受容について、Ⅰいかなる書が五山版と刊行され、解釈されているのか、Ⅱ禅僧はどのような柳文解釈をして抄物を製したのか、Ⅲ禅僧はどのように柳宗元作品を自身の詩文集に詠出していたか、の三点に着目し、その基礎的事項を解明した。研究成果については、研究雑誌に随時掲載した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：各国文学・文学論

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論（2904）

キーワード：中国文学・国文学・五山文学・柳宗元・抄物

1. 研究開始当初の背景

日本における漢文学の受容史上、その成果が極めて顕著に世に示された時期が三度存在する。第一期として奈良・平安時代の貴族の漢詩文、第二期として鎌倉末期より室町時代に栄えた五山禅僧の漢詩文、第三期として江戸時代の文人の漢詩文がそれにあたる。近來の日本漢文学の研究を概観すると、第一期の奈良・平安時代と第三期の近世江戸時代の漢詩文に眼が向けられる傾向が強い。そのため、中間の鎌倉・室町期の禅僧の作品は、そ

の存在を認められながらも、敬して遠ざけられていると言える。

さらに禅林における中国文学受容に関する研究について言えば、従来の研究方法は国文学研究領域と中国文学研究領域が間断されており、広い視野から見た統合的な研究がなされていない感がある。

中国における様々な文人が製した詩文集・総集がどのように日本に流入し、禅僧がそれらをどのように解釈し、自身の詩文作成に昇華させていったか、といった点については、部分的な研究は存在するも、体系的にと

らえた研究は未だにほとんど研究がなされていない。

筆者が着目した文人・柳宗元は、中国においては高い評価を得ながらも、日本中世禅林においてどのように受容されていたか全く不明と言える。

2. 研究の目的

この度の交付期間のみに限らず、筆者の研究の全体構想としては、中国における様々な文人が製した詩文集・総集がどのように日本に流入し、禅僧がそれらをどのように解釈し、自身の詩文作成に昇華させていったか、ということを解明することである。

この度の交付期間においては、中国の文人の中で柳宗元に着目する。柳宗元は韓愈と併称される、唐代を代表する文章家の一人である。その文章は中国は勿論のこと、日本禅林に対しても強い影響を与えている。本研究の目的は、柳宗元の詩文がいかに禅林において受容されていたかについて解明することである。とりわけ、三年間という期間の中で、下記Ⅰ～Ⅲについて解明することを主たる目的とする。

Ⅰ：中国より日本禅林に流入した柳宗元の詩文集と禅林で製された柳宗元の詩文集（五山版）の実態を解明すること

Ⅱ：禅僧が柳宗元の詩文について注解した抄物の実態を解明すること

Ⅲ：禅僧が自身の詩文に、柳宗元に関してどのように詠出したかについて解明すること

これら三点については、現在のところ未開拓である。そのため、三年間でまずはそれぞれの観点に関する基礎的事項を調査し、その上で三点がどのように結びつくのか追究していく。

3. 研究の方法

目的に応じて以下のように研究を行う。

Ⅰについては、日本に所蔵される五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』や『増廣註釋音辯唐柳先生集』を調査し、それらを禅僧がどのように解釈しているのか追究する。五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』は所蔵されている機関が多く、『増廣註釋音辯

唐柳先生集』についても宋・元版が幾つかの機関に所蔵されている。それらの機関に赴き、実際の資料を閲覧・調査する。さらに、それを踏まえた上で両足院に所蔵されている『柳文抄』にどのような影響を与えていたかについても精査する。

Ⅱについては、まず『柳文抄』の内容を吟味する。作品の排列よりいずれのテキストを底本にしたか選定し、抄の中に出てくる講抄者を整理して誰が抄者であるのか選定していかなければいけない。『柳文抄』の中から抄者を特定できない場合には、五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の書き入れや、『古文真宝』や『三体詩』に収められている柳宗元作品の抄を精査しなければいけない。その上で、禅僧がどのように柳文を解釈しているのか検討していく。

Ⅲについては、『五山文学全集』と『五山文学新集』に収められている各禅僧の詩文集、及び禅僧が製した文学作品において、柳宗元がどのように詠出されているかについて精査する。まだ翻刻されていない禅僧の作品集も存在するので、それらに関しては所蔵機関で閲覧し、確かめる必要がある。また禅林を初期（鎌倉時代末期～南北朝時代末期）・中期（南北朝時代末期～応仁の乱頃）・後期（応仁の乱頃から室町時代末期）の三期に区切り、各時期ごとにどのように受容が変化しているか等についても追究する。

以上の三点について研究を深めるが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲはいずれも深く関連している。それぞれの点を調査するも、総合的に研究を深めていくことにする。

4. 研究成果

目的に応じて以下に研究成果を述べる。

Ⅰについては、日本に現存する五山版『新刊五百家註唐柳先生文集』をほぼ閲覧することができた。閲覧した機関は、内閣文庫・国会図書館・書陵部・東北大学・静嘉堂文庫・大東急記念文庫・成實堂文庫・天理図書館・龍谷大学・杏雨書屋・国立歴史民俗博物館・一誠堂・東洋文庫である。いずれの所蔵本も書き込み註が多かったが、中でも東北大学・国立民俗博物館・宮内庁書陵部・東洋文庫の所蔵本は、『柳文抄』の内容に関わる書き入れが為されており、禅林と関係が深いものであることが分かった。

禅林と関係の深い五山版『五百家本』の中

で、国立歴史民俗博物館所蔵本は、書き入れ者不明の奥書が書かれている他、夥しい書き入れが書き込まれている。その書き入れの中に、宮内庁書陵部所蔵本の書き入れと共通するものが存し、その注者に「黙雲」とある。また、民俗博物館所蔵本の奥書に書かれた書き入れ者の年齢などから、当所蔵本の書き入れ者が天隠龍澤であることを指摘した。

Ⅱについては、両足院所蔵の『柳文抄』は、継天寿叡が所有していたものを林宗二が書写したことしか分かっていなかった。

まず中身を精査していくと、『柳文抄』は仮名で書かれた抄と漢文体で書かれた抄で構成されることが分かった。次いで作品の排列を『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』や『増廣註釋音辯唐柳先生集』の排列と照らし合わせてみたところ、『柳文抄』は大凡『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』を底本にしているが、中には『増廣註釋音辯唐柳先生集』を底本にしている箇所も存在することが分かった。

次いで解釈を引用されている禅僧を整理すると、夢巖祖応・中巖圓月・義堂周信・心華元棣・雲溪支山・無因宗因・在先希諶・伯英徳俊・太白真玄・岐陽方秀・惟肖得巖・江西龍派・勝剛長柔・瑞溪周鳳・東岩等がおり、中でも江西龍派と惟肖得巖の抄が頻繁に引用されていることが分かった。

江西龍派の注解及び惟肖得巖の注解を参考にし、自身の解釈を示しているのは瑞溪周鳳のみである。柳文受容においては、一庵一麟→江西龍派→瑞溪周鳳、蔵海性珍→惟肖得巖→瑞溪周鳳と、歴代の柳文解釈が継承されたことを指摘した。また現在散佚した瑞溪編纂『刻楮』の中に柳文の抄物が収められていたことと、『柳文抄』巻十七に「柳文刻楮抄」と書かれていることから、『柳文抄』の成立過程において瑞溪周鳳が深く関わっていることも指摘した。

『柳文抄』自体から抄者を特定するには至らなかった。そこで、五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の書き入れと照らし合わせたところ、最も『柳文抄』の抄と一致した書き入れを有するのは国立歴史民俗博物館に所蔵する五山版であった。Ⅰの研究成果で示したように、国立歴史民俗博物館所蔵本の書き入れ者が天隠龍澤であることから、両足院所蔵『柳文抄』も天隠龍澤が深く関わっていることを指摘した。

Ⅲについては、まず初期の禅僧の作品中に柳宗元に関する事項がどのように詠出されているか整理・検討した。その結果、初期における柳宗元受容について、①柳宗元の文章を高く評価している、②柳宗元における禅的要素に高い関心を抱いている、③柳宗元の

様々な事項に関する見解を参照して作品を製作することが多い、④初期より柳宗元詩文についての講義が行われ、『増廣註釋音辯唐柳先生集』をテキストに用いていた、といった特徴が見受けられた。

次いで、中期の受容状況を見ると、初期に比べてその様相は深化している。抄物が製されたり、夥しい書き入れが五山版に施されるようになる。それらの理由について、禅僧の作品集や『古文真宝』『三体詩』の抄物を精査したところ、日本禅林においては、韓愈の作品よりも柳宗元の作品の方が高く評価され、愛玩されていたことが分かった。その理由として、日本禅僧が渡った元朝に至っては柳文重視の傾向が強かったことを挙げた。その傾向が日本禅林にも影響を与え、禅僧は韓愈の文章よりもまず柳宗元の文章を学ぶことになったのである。柳文は文章に法度を兼ね備えているのに対し、韓文は文章に法度を兼ね備えていないため、雲溪支山等の高僧は早くから柳文の方が読みやすいことを提唱していた。さらに儒道第一とし、釈氏を批判する韓文は禅林に必要なとする評が生じ、その評が禅林に定着していたことも分かった。禅の宗旨を含み、卓越した詩を残している柳文は、韓文評を裏目にますます支持されたことを指摘した。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについては、研究題目にあるように、基礎的事項についての調査が終わった段階と言える。今後更に不明な点を解明していかなければいけない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

・太田 亨、建仁寺両足院所蔵『柳文抄』の編纂者について—国立歴史民俗博物館所蔵五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生集』書き入れ者との関係—、『国語国文』、第七十八巻第一号、pp1~15、2009、査読有

・太田 亨、柳宗元を学んだ禅僧たち—韓愈との比較—、『漢籍と日本人2』(『アジア遊学』第116号)、pp70~79、2008、査読有

・太田 亨、日本中世禅林における柳宗元受容—その過程と問題点—、『愛媛大学教育学部紀要』、第55巻、pp215~224、2008、査読無

・太田 亨、日本中世禅林における柳宗元受容の研究—初期の場合—、『中国古典文学研究』、第5号、pp66～83、2007、査読無

〔学会発表〕（計 2件）

・太田 亨、日本中世禅林における柳宗元—禅僧の異文化理解—、国際理解教育研究会、2008年2月16日、愛媛大学

・太田 亨、日本中世禅林における柳宗元受容の基礎的研究、四国東洋学研究者会議、2007年11月17日、高知大学

〔図書〕（計 0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0件）

○取得状況（計 0件）

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 亨 (OTA TOORU)
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：80370021

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者